

未来医療の産学医連携推進

学校法人

大阪滋慶学園

滋慶医療科学大学・大学院が新次元へ

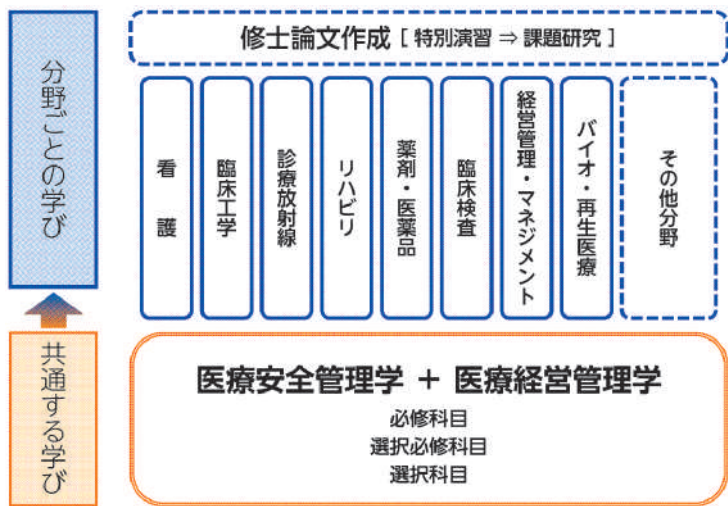
定員や学科を増やし社会課題解決

大阪滋慶学園は医療科学の将来を見据え、高度な人材教育を目的とする滋慶医療科学大学・大学院の学科再編を実施する。大学院は2025年4月に定員を倍増し48人とする。他に類を見ない医療安全講座を充実し、総合医療機関に配置が義務づけられている医療安全管理責任者を育成する。大学は医療科学部臨床工学学科の定員を80人から40人に減らす一方、診療放射線学科などの新学科開設を構想している。

滋慶医療科学大学・場では活躍する人材が医療安全分野について学び直す、リスクリンから医療安全の教育の場としても位置を軸にしている。今後、定員増に合わせ、教授や特任教授による基礎教育を充実を図り、大阪、滋慶学園が専門学校のイオ・再生医療、臨床検査、診療放射線、理学療法、作業療法、社会福祉、精神保健衛生など12講座にそれらの医療安全管理者配置を可能にする。大学院は、看護師、臨床工学技士、診療放射線技師、理学療法士、作業療法士らが医療安全を学ぶ場として、大阪・中ノ島に未来医療に関する施設を設けた。一方、大学は医療科学部臨床工学学科の定員を80人から40人に減らす一方、診療放射線学科などの新学科開設を構想している。



滋慶医療科学大学・場では活躍する人材が医療安全分野について学び直す、リスクリンから医療安全の教育の場としても位置を軸にしている。今後、定員増に合わせ、教授や特任教授による基礎教育を充実を図り、大阪、滋慶学園が専門学校のイオ・再生医療、臨床検査、診療放射線、理学療法、作業療法、社会福祉、精神保健衛生など12講座にそれらの医療安全管理者配置を可能にする。大学院は、看護師、臨床工学技士、診療放射線技師、理学療法士、作業療法士らが医療安全を学ぶ場として、大阪・中ノ島に未来医療に関する施設を設けた。一方、大学は医療科学部臨床工学学科の定員を80人から40人に減らす一方、診療放射線学科などの新学科開設を構想している。



アジアの国際職業教育による人材育成と

マネジメント力備えた人材育成

大阪滋慶学園は「職業人教育を通して社会に貢献する」ことをミッションとして掲げ、医療分野を中心にこれまで多くの人材を送り出してきた。専門学校に加え、大学・大学院を擁し、リカレント教育にも力を入れる。半世紀近くわたって専門家の養成に力を入れてきた大阪滋慶学園が、将来に向けてどのような戦略を描いているのか、理事長である浮舟邦彦・滋慶学園グループ総長に聞いた。

大阪滋慶学園では職業人教育に力を入れています。「単なる職業教育ではなく、職業・人・教育であること」にこだわっている。専門家として即戦力になるための専門教育を行い、分野によっては仕事に欠かせない国家資格を取得させることは必要だ。ただ知識を身に付けさせるだけでなく、すべてではない。あくまで教育を通じて人づくりを大切にしている。そのための社会人としての基礎力、一緒に働きたいと思わせるための人間力も教育する。そのため

の軸となるのが、『美学教育』『人間教育』『国際教育』の三つの建学理念だ。

「『まず社会人として信頼される人材を送り出す』というディープ・ポリシー、専門分野の知識・技術を身に付け世界で活躍している教育をするためのカリキュラム・ポリシーがあり、自分はこのことをやりたい」という目的・目標をしっかりと持った学生に入学してもらいたいというアドミッション・ポリシーを明確にしている。実際、若

い人たちは職業に對してしっかりとした思いを持っている。そのような目的意識を持って入学してもらいように働きかけている。

「滋慶学園グループでは毎年、中高生を対象に大阪府立体育館で職業体験セミナーを開催し、70種類以上の職業を体験してもらっている。5000人から6000人が参加してくれているが、子どもたちが職業に対して本当に真剣に考えていると感じている」

「中々島クロスは再生医療や

創薬など未来医療や産業創出の拠点となる。大阪滋慶学園でも1987年に開校した大阪ハイテクロジック専門学校が当初から生命工学技術科（現バイオ・再生医療学科）を設置するなど、バイオ関係の技術者を業界に送り出してきた。「滋慶中・島センター」は大学・大学院をベースとした教育・研究開発センターと位置付ける。IPS細胞（人工多能性幹細胞）など生命科学の研究や実習が行える環境を備えており、ここを拠点に学外の企業や研究機関と幅広く協力し、社会への貢献や人材育成に活用していきたい。一般向けのセミナーや児童・生徒向けの啓発セミナーなども開催している。昨年7月には未来医療国際拠点「中々島クロス」に、「滋慶中・島センター」を開所している。

「中々島クロスは再生医療や

創薬など未来医療や産業創出の拠点となる。大阪滋慶学園でも1987年に開校した大阪ハイテクロジック専門学校が当初から生命工学技術科（現バイオ・再生医療学科）を設置するなど、バイオ関係の技術者を業界に送り出してきた。「滋慶中・島センター」は大学・大学院をベースとした教育・研究開発センターと位置付ける。IPS細胞（人工多能性幹細胞）など生命科学の研究や実習が行える環境を備えており、ここを拠点に学外の企業や研究機関と幅広く協力し、社会への貢献や人材育成に活用していきたい。一般向けのセミナーや児童・生徒向けの啓発セミナーなども開催している。昨年7月には未来医療国際拠点「中々島クロス」に、「滋慶中・島センター」を開所している。

「中々島クロスは再生医療や

創薬など未来医療や産業創出の拠点となる。大阪滋慶学園でも1987年に開校した大阪ハイテクロジック専門学校が当初から生命工学技術科（現バイオ・再生医療学科）を設置するなど、バイオ関係の技術者を業界に送り出してきた。「滋慶中・島センター」は大学・大学院をベースとした教育・研究開発センターと位置付ける。IPS細胞（人工多能性幹細胞）など生命科学の研究や実習が行える環境を備えており、ここを拠点に学外の企業や研究機関と幅広く協力し、社会への貢献や人材育成に活用していきたい。一般向けのセミナーや児童・生徒向けの啓発セミナーなども開催している。昨年7月には未来医療国際拠点「中々島クロス」に、「滋慶中・島センター」を開所している。

「中々島クロスは再生医療や

創薬など未来医療や産業創出の拠点となる。大阪滋慶学園でも1987年に開校した大阪ハイテクロジック専門学校が当初から生命工学技術科（現バイオ・再生医療学科）を設置するなど、バイオ関係の技術者を業界に送り出してきた。「滋慶中・島センター」は大学・大学院をベースとした教育・研究開発センターと位置付ける。IPS細胞（人工多能性幹細胞）など生命科学の研究や実習が行える環境を備えており、ここを拠点に学外の企業や研究機関と幅広く協力し、社会への貢献や人材育成に活用していきたい。一般向けのセミナーや児童・生徒向けの啓発セミナーなども開催している。昨年7月には未来医療国際拠点「中々島クロス」に、「滋慶中・島センター」を開所している。

「中々島クロスは再生医療や

創薬など未来医療や産業創出の拠点となる。大阪滋慶学園でも1987年に開校した大阪ハイテクロジック専門学校が当初から生命工学技術科（現バイオ・再生医療学科）を設置するなど、バイオ関係の技術者を業界に送り出してきた。「滋慶中・島センター」は大学・大学院をベースとした教育・研究開発センターと位置付ける。IPS細胞（人工多能性幹細胞）など生命科学の研究や実習が行える環境を備えており、ここを拠点に学外の企業や研究機関と幅広く協力し、社会への貢献や人材育成に活用していきたい。一般向けのセミナーや児童・生徒向けの啓発セミナーなども開催している。昨年7月には未来医療国際拠点「中々島クロス」に、「滋慶中・島センター」を開所している。

「中々島クロスは再生医療や

創薬など未来医療や産業創出の拠点となる。大阪滋慶学園でも1987年に開校した大阪ハイテクロジック専門学校が当初から生命工学技術科（現バイオ・再生医療学科）を設置するなど、バイオ関係の技術者を業界に送り出してきた。「滋慶中・島センター」は大学・大学院をベースとした教育・研究開発センターと位置付ける。IPS細胞（人工多能性幹細胞）など生命科学の研究や実習が行える環境を備えており、ここを拠点に学外の企業や研究機関と幅広く協力し、社会への貢献や人材育成に活用していきたい。一般向けのセミナーや児童・生徒向けの啓発セミナーなども開催している。昨年7月には未来医療国際拠点「中々島クロス」に、「滋慶中・島センター」を開所している。

「中々島クロスは再生医療や

創薬など未来医療や産業創出の拠点となる。大阪滋慶学園でも1987年に開校した大阪ハイテクロジック専門学校が当初から生命工学技術科（現バイオ・再生医療学科）を設置するなど、バイオ関係の技術者を業界に送り出してきた。「滋慶中・島センター」は大学・大学院をベースとした教育・研究開発センターと位置付ける。IPS細胞（人工多能性幹細胞）など生命科学の研究や実習が行える環境を備えており、ここを拠点に学外の企業や研究機関と幅広く協力し、社会への貢献や人材育成に活用していきたい。一般向けのセミナーや児童・生徒向けの啓発セミナーなども開催している。昨年7月には未来医療国際拠点「中々島クロス」に、「滋慶中・島センター」を開所している。

「中々島クロスは再生医療や

創薬など未来医療や産業創出の拠点となる。大阪滋慶学園でも1987年に開校した大阪ハイテクロジック専門学校が当初から生命工学技術科（現バイオ・再生医療学科）を設置するなど、バイオ関係の技術者を業界に送り出してきた。「滋慶中・島センター」は大学・大学院をベースとした教育・研究開発センターと位置付ける。IPS細胞（人工多能性幹細胞）など生命科学の研究や実習が行える環境を備えており、ここを拠点に学外の企業や研究機関と幅広く協力し、社会への貢献や人材育成に活用していきたい。一般向けのセミナーや児童・生徒向けの啓発セミナーなども開催している。昨年7月には未来医療国際拠点「中々島クロス」に、「滋慶中・島センター」を開所している。

就職フェア2024



参加者も増加し、会場は大いににぎわった（就職フェア2024の会場）

大阪国際会議場で大規模開催

大阪滋慶学園グループが参加、20回目を迎えた就職フェアの会場は、日、学生の就職活動を熱心にあふれた。支援する「就職フェア 医療・福祉業界は再2024」を大阪国際会議場（大阪市北区）で開いた。学生2000人、新たな技術の組み合わせによるヘルスケアの分野が盛んになって、問、そのうち2回は自

決意新たに グループ5校で看護戴帽式

大阪滋慶学園グループ5校（大阪保健福祉専門学校、大阪医療看護専門学校、出雲医療看護専門学校、鳥取市医療看護専門学校、美作市スポーツ医療看護専門学校）が「戴帽式」を挙行了した。看護についての専門教育を受ける学生たちが、病院での実習に進む前に行う儀式で、大阪保健福祉専門学校と大阪医療看護専門学校は11月9日、ホテルニューオータニ大阪（大阪市中央区）で開催。保護者の参加人数やマスクなどの制限はなく、コロナ前に近い形で執り行った。式の終盤に行われた学生の宣誓には家族や今まで支えてくれた人々に向けた感謝の言葉もあり、涙ぐむ保護者の姿も見られた。



大阪保健福祉専門学校の戴帽式

戴帽式は1年生が神聖なナースキャップを教員より授けられ、病院実習に臨む前に決意を新たにするとある。看護学科を設置するグループ各校では戴帽式を大きな節目ととらえている。医療現場に出ればベテランも若手も区別はない。実習生とはいえ、患者からすれば皆が頼りにする存在である。学生一人ひとりがこうした意識を深めるためにも、戴帽式を実施する意義は大きい。

インタビュー



滋慶学園グループ総長 浮舟 邦彦氏

《プロフィール》
うきふね くにひこ 64年（昭39）関西学院大卒。学校法人滋慶学園、同大阪滋慶学園各理事長。滋慶学園グループ総長。医療秘書教育全国協議会理事長。米州立ウエストフロリダ大、韓国啓明大の教育名誉博士。大阪府出身、84歳。

新しいジャンルの教育にも力

「中々島クロスは再生医療や創薬など未来医療や産業創出の拠点となる。大阪滋慶学園でも1987年に開校した大阪ハイテクロジック専門学校が当初から生命工学技術科（現バイオ・再生医療学科）を設置するなど、バイオ関係の技術者を業界に送り出してきた。「滋慶中・島センター」は大学・大学院をベースとした教育・研究開発センターと位置付ける。IPS細胞（人工多能性幹細胞）など生命科学の研究や実習が行える環境を備えており、ここを拠点に学外の企業や研究機関と幅広く協力し、社会への貢献や人材育成に活用していきたい。一般向けのセミナーや児童・生徒向けの啓発セミナーなども開催している。昨年7月には未来医療国際拠点「中々島クロス」に、「滋慶中・島センター」を開所している。

地域総合型スポーツクラブにおける医科学サポートの事例紹介

—中学校部活動に理学療法士が介入する意義について—

大阪医療福祉専門学校
理学療法士学科 夜間部4年生
（写真右から）
堀内 大翔さん
内山 亜衣さん
田上 陽大さん
足立 勝哉さん
堺市で中学校教師らが立ち上げた地域総合型スポーツクラブ「Escorade野田」のサッカー部の生徒に体幹機能評価とトレーニング指導を行い、トレーニング前後での体幹機能の差について検討した。障害を

クと固有感覚の刺激入力があり、有効とされている。同筋を適切に鍛え、継続的な障害予防のシステムを構築することが本研究の重要な目的。介入後は体幹機能の持久力が改善したことが明らかになった。結果、成長期のアスリートの障害予防には、身体発達に精通した専門職による個別的、継続的な介入が有効で、これからのクラブ運営には、競技指導者だけでなく理学療法士などの医療スタッフの配置が必要だことが示唆された。

国家資格総取得者数
理学療法士1423人 作業療法士1266人
視能訓練士1303人 言語聴覚士565人 社会福祉士114人

身だしなみによる印象の変化

—髪色が与える印象に焦点を当てて—

大阪医療看護専門学校
看護学科 3年生
（写真前列右から）
神 愛梨さん
松宮 望花さん
松井 陽音さん
三崎 梨枝さん
大森 りんさん
上阪 颯さん
本研究は髪色の違いによる印象の変化に着目。医療現場で派手な髪色が相手に与える印象について調査し、髪色が患者との信頼関係

結果、医療の現場で患者は不安を抱えることが多く、看護師の外見はその心理状態に影響を与える。黒髪は控えめで落ち着いた印象で患者に安心感を与え、リラックスした状態でコミュニケーションをとることができると、黒髪が医療の現場に適していると考えた。1年生からは派手な髪に肯定的な意見が多かったが、これは実習などの臨床経験が少ないことが原因だと考察した。今後は一般の人や患者の意見も調査する必要があるという課題も残った。

国家資格総取得者数
看護師701人

教育に使用できる脈波計の作成

出雲医療看護専門学校
臨床工学技士学科 3年生
（写真右から）
川瀬 悠斗さん
鶴見 俊介さん
臨床工学技士は医工両面から医療機器に関する知識や技術を習得する。しかし、医療機器はIC化が進み、学生にはその内部構造や動作原理が理解しにくいものとなっている。そこで本研究では、一般に入手しやすい電子部品を使って

に役立てる方法を検討した。まず、体表から指の血管に赤外線を照射し、反射する光の量が血流量により変化することを利用して脈波を計測した。また、ワンボードマイコンを用いて脈波計をWiFi（ワイファイ）に接続し、スマートフォンで操作できるようにした。結果、機動脈を触知して計測した脈波数と大きな誤差がなく、脈波計として正しく機能したことがわかった。しかし、教育効果の測定については今後の課題として残った。

国家資格総取得者数
看護師555人 臨床工学技士156人
理学療法士214人 言語聴覚士73人

非利き手での書字動作に使用物品が及ぼす影響について

鳥取市医療看護専門学校
作業療法士学科 3年生
（写真右から）
福井 友希さん
伊藤 奏美さん
濱口 愛さん
井田 華鳳さん
岩谷 心暖さん
脳血管障害の後遺症や事故などで利き手が機能しなくなった場合や欠損した場合は利き手交換のリハビリをする必要がある。今回、書字動作に着目し、鉛筆の太さや形状、補助員の

違いが筆記時間に与える影響について検証した。研究の結果、六角形の鉛筆を使用した方が、三角形の鉛筆より筆記時間を短縮できることがわかった。アンケートでも六角形の方が握りやすくて書きやすいという回答が多かった。このことから、効率的な鉛筆の操作には親指と人差し指の間に適度なスペースが必要だが、三角形の鉛筆は手指の設置面積が広い反面、鉛筆の安定性を向上させるために人さし指の第一関節を伸ばす必要がある、親指と人さし指の間のスペースが狭くなると動作効率を低下させると考えた。

国家資格総取得者数
看護師424人 理学療法士202人
作業療法士148人 言語聴覚士63人